
カワイイヒト

リオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カワイイヒト

【Nコード】

N2422B

【作者名】

リオ

【あらすじ】

いつも窓から手を振る可愛いあの人。可愛い笑顔に恋したけれど、実はあの方は、××だった！？それでも好きなこの気持ちは、どうしたらいいんだろう。

【プロローグ】（前書き）

古い小説を少し修正しつつ更新して行きます。

【プロローグ】

「おはよう、エナちゃん」

高校への通学路。

いつも通るこの道には、三階建ての小さな可愛いマンションがある。
って。

いつも、頭上から降ってくる声。

二階の右端、窓から、笑顔で私に手を振る人。

「おはようございます、景都さん」

私も、笑顔を返す。

「今日も頑張ってるー！」

はしゃいだ様に身を乗り出して、ぶんぶん手を振る姿が可笑しくて、つい笑ってしまう。

「あはは！うん、頑張るー！」

これがいつもの、朝の挨拶。

景都さん——水橋景都は、今売り出し中の画家さんで。

三ヶ月前、窓から景色をデッサン中の景都さんのマンションの前で、私は派手に転んだことがあった。

大いに笑ってくれちゃってさ。

それから、この挨拶が日課になった。

でも、それだけ。

景都さんのことは、あまりよく知らない。

画家さんで、あのマンションに一人暮らしで、二十六歳だってこと。
と。

ハッキリ言って二十六歳には見えないのですが……。

私より幼く見える、あの笑顔。

茶色い猫っ毛が、更に幼く見えて。

窓からの景都さんしか知らないから。

余計そう思えるのかな。

「エナ？エーナ！」

「……へ？あ、何？」

「何じゃないよ、ホームルーム終わったよ！」

「ええ！？」

「あちゃー……」。

考え事してて授業全部終わっちゃうなんて……相当な空想力ね。

「じゃーねー」

友達と別れて、家に繋がる道を歩く。

景都さんのマンションが、見えて来る。

目の前に差し掛かると、階段を降りる音が聞こえて。

同時に、素っ頓狂な声。

「あれ！？」

「わ！景都さん！？」

声の主を振り返ると、いつもより低い位置にあの幼い顔があつて。

でも、予想よりは背が高かった景都さんがいた。

「エナちゃんだあ」

ふにやつと崩れる顔。

その笑顔は、地上でも変わらなかった。

……って当たり前だけ。

けれど、均整の取れた細身の体にスラリと伸びた四肢。

近くで見ると、可愛いと言うよりも、綺麗な人で。

男っぽい黒のパンツとジャケットは、不似合いな筈なのに、キチンと着こなされていて。

何故だか、鼓動が速まった。

「エナちゃん今帰り？」

「あ、はい！ そうです、帰りです！」

慌てて答えた私に、景都さんの目が丸くなる。

けど、すぐに崩れて。

「そつかあ、気を付けて帰ってね」

ニコニコしてる景都さんに、頭を撫でられた。
触れられたのも、もちろん初めて。

その瞬間、フワッと香った優しい景都さんの匂い。
妙に私の胸を弾った。

景都さんは絵の参考にする写真を撮りに行くとかで、私達はすぐに別れた。

「また明日ね」

景都さんのその言葉が、何でか凄く嬉しかった。

初めて間近で見た景都さんだったのに、まともに見れなかったのが悔しい。

何で見れなかったのか、分からないのだけれど……。

【プロローグ】（後書き）

読んで下さりありがとうございます 是非、最後までお付き合い下さい。

第一話【初恋?】

「はぁ……」

あれ以来、窓からの景都さんしか見ていない。

それがいつも通りなのに、何か寂しい。

急に存在を近くで感じてしまったから。

これって、恋とか? ——分からない。

「初恋もまだだし……」

「マジで!？」

すっかり言葉にしてしまった。

一緒に下校する数人が、信じられないとばかりに私を見る。

「高二にもなつてあんた……」

「いいじゃん別に……」

まだなものは、まだなんだもん。

「恋ぐらいしなよ」

別れ際、そんな捨て台詞まで吐かれてしまった。

私だって恋したい。

恋愛してみたいよ。

でも、私はそこら辺にゴロゴロ転がってる様な普通の女。

顔も普通で、性格も特に良いと言う所はない。

好きになつて貰ったこともなければ、好きになったこともない。

みんなが言う様なドキドキは、感じたこともなかった。

ただ、景都さんの前で高鳴ったあの鼓動。

私は恋のドキドキを知らないから、本当にまだ分からないけれど、予感がする。

でも、そんな急に恋に落ちることなんてある?

……急ではないか。

恋、なのかなあ。

「うう…考え過ぎて頭こんがらかってきた」

うんうん唸って歩く私に、笑い声が降り注ぐ。
聞き慣れた声。

ビククリして見上げると、やっぱり窓に景都さん。

「エナちゃんてば凄い顔！」

「え……やだ！」

そんなに笑うなんて、私そんな酷い顔してたの！？

私は恥ずかしくて赤くなった顔を、隠す様に手で覆った。
やっぱり、ドキドキしてる。

心臓が馬鹿になりそうな程跳ねて。

これが、恋…？

「エナちゃん明日学校休みだよな？」

突然の問いかけに、私は思わず上を向く。

まだ顔が赤いかもしれないのに、そんなことも忘れて、景都さんを見た。

「休みです……」

浮かされた様に、答えた。

すると景都さんは、眩しいくらいの笑顔を見せて。

「明日ちよつと付き合って」

そう語尾にハートマークが付きそうな口調で言つもんだから。
更に赤くなつた顔を、私は縦に振った。

「お昼頃うちに来てくれる？」

景都さんの家……。

招待されてしまった。

ドキドキが、うるさい。

ああ、きつとこれが恋なんだ……。

「わ、分かりました！」

それだけ言つて、私はその場を走り去る。

だって、恋だって自覚したら、信じられないくらい恥ずかしくな
つて。

茹で蛸な私を、景都さんに見られなくなかったから。
「明日……景都さんの家に……」
その日は、よく眠れなかった。

第二話【失恋！？】

凄く気に入って買ったピンクのワンピース。

厚手の生地の子に、白いレース、そのレースには、小振りなりボ
ンがあちこちに結ばれている。

ホットカラーで髪にウェーブを作って、白のジャケットを羽織
り、私は家を出る。

いつもの通学路。

でも、いつもと違って薔薇色に見えた。

もうすぐ、景都さんのマンション。

ドキドキする胸に手をあてて、深呼吸して前に進む。

マンションが目に入ると、下に景都さんが立ってるのが見えた。

「あ……っ」

二回目だ。

窓からじゃない、景都さん。

私に気付いて手を振ってる。

私は嬉しくて、景都さんの元へ駆け寄った。

「こ、こんにちは……」

「こんにちは。わぁ、今日凄く可愛いね」

「う……ありがとう、ございます……」

満面の笑みで、可愛いと言われて。

顔に血が逆流しそうになるのを、グッと堪えた。

だって、また赤くなって恥ずかしがったりしたら、景都さんとか

ちゃんとお話し、出来ないし。

今日は、頑張るって決めたんだから。

「どうぞ。上がって」

「あ、邪魔します」

でも、今日、何をするんだろう？

ちよつと付き合つて、としか言われてないし。
もしかして……なんて馬鹿な期待はしない様に、用意されたスリッパを履いた。

室内は、凄く綺麗に片付けられていて。
思わずキョロキョロと見渡してしまう。

部屋中、この前微かに香った景都さんの匂いが支配していて。
知らず知らずのうちに、顔が綻んだ。

「どうぞ座つて」

「え！ あ、はい……！」

キッチンで紅茶を入れてくれていた景都さん。

後ろから声をかけられたから、ニヤケた顔を見られなくて良かった……。

ホツと胸を撫で下ろし、リビングにあるソファーに座った。

カチャつと私の目の前にティーカップを置き、景都さんも私と対面する様に腰を下ろした。

景都さんは、コーヒーを飲んでるみたい。

伏せた瞳に、長い睫が映えて。

私は、食い入る様に見つめてた。

「……エナちゃん」

「はいいい！」

バレた！？ 見てたのバレたの！？

一人パニックになり、拳動不審になる私の手を、突然、景都さんが握り締める。

ドクンと、心臓が跳ねた。

「景都さ……」

「お願いがあるんだ」

「……お願い？」

ちよつと、ガツカリ。

手、握られて、やっぱり馬鹿な期待しちゃって。
そのガツカリを振り払い、私は景都さんを見る。

不意に、真剣な眼差しとぶつかった。

「お願いって……何ですか……？」

「……脱いで欲しい」

……。

はい？ 私、耳がおかしくなったのかしら。

「ちょ……ちょっと聞こえなかったみたい」

「脱いで欲しいんだ」

……。

脱いで……欲しいとは？ 脱いで……脱い……。

「はい！？」

「ごめんね！ でも、一生のお願い！」

両手を合わせて拝まれて。

そんなことされても、いきなり脱いでくれって言われてもワケ分かんないよお！

「あの、何で……」

クラクラと目眩を起こす頭を庇い、私は額に手をあてる。

そんな私を見て、景都さんはポツリポツリと語り始めた。

「コンクールが近づいて……。被写体をずっと探してたんだけど……」

話しながら、景都さんは本当に申し訳なさそうな視線を私に向ける。

追い詰められている様にも感じられた。

「構想は固まってるんだ。その絵にピッタリなモデルは、エナちゃんしかいなくて……」

どんな形であれ、私は、好きになった人から求められてる。

応えてあげたい。

でも……。

でも！ ヌードなんでしょお！？

「コ、コンクールに出す絵なんですから、私なんかやめた方が……」
「君じゃなきゃ駄目なんだ！ 三ヶ月前、初めて君を見た時から、

この絵の構想を練ってたんだ！」

少し、驚いた。

いつも太陽みたいな可愛い笑顔の景都さんが、眉間に皺を寄せて、こんなに真剣に声を張り上げて。

「頭の中のイメージは、君なんだ……」

「でも、裸を男性に……なんて……」

いくら好きな人でも、いきなり裸を見せるなんて、流石に出来ないよ……。

「——エナちゃん、大丈夫だよ」

「……え？」

顔を上げると、景都さんは何故かニツコリと微笑んでいた。

「私、女の子には興味ないから」

ニコニコ笑いながら、景都さんが発した言葉。

耳を疑った。

脱いでくれてって言われた時よりも。

私の頬を、冷や汗が伝う。

「そ……それってつまり……」

「うん、ゲイなのよ私」

「げ!？」

ゲイ……？

私が好きになった人は……ゲイ!!

「嘘お!!」

「ほんとお」

全く曇りのない笑顔。

本当なの？ 本当に頭痛くなって、目が回って。

思考が、纏まらない。

「心は女だから、心配することないの。だから……お願い」

そっ、そんな女みたいな色仕掛けを！ ああ、でも、もうどうでもいいやあ……。

「分かりました……」

「きゃー！！ エナちゃんありがとう！」

抱きつかれて、ぎゅうってされて。

本当なら嬉しい行為なのに、ジワツと涙が滲んだ。

好きだって気付いて、すぐ失恋。

私の初恋の相手は、ゲイでした……。

うつ、最低。

第三話【契約】

「モデル料のことなんだけど」

「そんなの…… いらなです」

初めての恋なのに、まさかこんなに直ぐに真っ暗闇に突き落とされるとは思わなかった。

私の好きになった人は、恋愛対象が、男。

そんなオチ、信じられない。

険しい顔で、グルグルとそんなことを考えていた。

「エナちゃん、モデルとして君を拘束してしまうんだから、報酬は払わせてくれないと……」

「いらなです」

煎れて貰った紅茶のカップを持って、中のお茶をユラユラ揺らす。さつきから、ずっとそれを繰り返してる私を見て、景都さんは、凄く困った顔してる。

「じゃあ、何か欲しい物はある？」

「…… お菓子」

報酬…… お金なんて、貰えないし。

お菓子なら好きだし、美味しいし。

景都さんは、どこかホッとして、それでもまだ、困った様な顔をしていて。

急に私が、沈んだことが原因だろうか。

景都さんは、それで渋々手を打った様で、簡単な契約を交わした。契約書みたいな大それた物はなくて、簡単な口約束。

学校が終わってから景都さんの家に直行して、九時までモデルをやった後、夕飯をご馳走になる——景都さんがどうしてもって——そして帰宅。こんな感じ。

「じゃあ、明日から宜しくね」

「はい……」

浮かない顔の私を、景都さんは心配そうな顔で送り出してくれた。暫く私の後ろ姿を見送ってくれていたみたいだけど、私は振り返ることも出来なくて、ずっと自分の爪先を見て歩いてた。

胸が、締め付けられる様に苦しくて。

唇を噛み締めていないと、涙が零れて、止まらなくなりそうで。

何で。

何で……。

決定的に失恋なのに。

「馬鹿だな……私……」

景都さんのこと、まだ、好きだなんて。

ゲイ……の人に恋しちゃうなんて、有り得ない。

でも、仕方ないじゃない。

好きになっってから、知ったんだから。

叶わない恋心。

きっと、誰かにバレたら、引かれちゃうだろうけど。

初めての恋。

大事にしたい。

好きでい続けても、いいよね？

「うん……」

自分の心の声に返事して、私は、前を向いた。

今日も、学校は休み。

休みの日は、午後一時の約束で。

もうすぐ、時間。

ピンクのセーターに、白のフリルスカートを履いて、家を出る。

好きでい続けると決めたから、今日もお洒落をした。

少しでも、可愛く見られたいと思ったから。

ほぼ真っ直ぐの、景都さんのマンションまでの道程。

特殊な恋心を大事に抱え、私は足を速めた。

「エナちゃん！」

今日も景都さんは、マンションの外に出て待っていていた。

「こんにちは、景都さん」

「うん、こんにちは」

ニツコリ笑う景都さんは、凄く可愛くて。

ゲイよりもニューハーフの方が向いてそう……。

とか、変なことを考えてみたり。

好きな人を更に遠ざけてどうすんのさ。

「どうぞ」

「お邪魔します」

景都さんの家に、一歩足を踏み入れた途端、妙な緊張感を感じた。彼はゲイだから、女の私の裸なんて何とも思わないだろうけど。

それでも、私は景都さんが好きだから。

これから、好きな人に裸を見せるなんて、めちゃくちゃ緊張しちゃう。

「ちよつとこつち来て」

ボーツとしてはいたけれど、緊張のせいかいつもより敏感になつてみたいで、景都さんの私を呼ぶ声に体がビクツと跳ねた。

「は、はい！」

慌てて頭を覚醒させる。

景都さんの招く手に導かれる様に、私は一つの部屋へと足を踏み入れた。

「わ……あ……」

そこは、独特な匂いを漂わせ、色んな色彩に溢れる空間だった。

絵画の模写や、何処かで見たことある景色。

様々な絵が、壁、棚、床などを飾っていて。

それぞれ、同じ個性の輝きを放っていた。

「これ……みんな景都さんが？」

「そうだよ」

ちよつと照れ臭そうに、景都さんは自分の頬を人差し指で掻く。

そしてその指は、ある一点を指した。

指の示す先には、大きなキャンバス。

そして、距離の置かれた、二つの椅子。

「ここで、エナちゃんを描かせて貰うから」

「ここで……」

「うん、私、絵に囲まれないと集中出来なくってえ」

両手で頬を押さえる景都さんは、とても可愛らしくて。

女を思わせる仕草が、チラリチラリと覗く度、私の胸は、苦しく痛んだ。

私の想いを邪魔する隔たりは大き過ぎて、悲し過ぎて。

きつと、普通の恋で経験する感情とは、強さと重みが違うだろうと感じた。

景都さんは、あの部屋に待機していて、私は準備の為にリビングへ戻る。

鈍い胸の痛みに耐え、震える手で服を脱ぎ始めたけれど、緊張と悲しさのダブルパンチは中々の物。

いつもの様に、上手いこといかない。

下着も何とか脱ぎ終わり、景都さんが用意してくれていた白く柔らかなバスローブに身を包んで。

深く酸素を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

第四話【モデル】

「……………」

準備は整ったけど。

部屋へと向かう一歩が出ない。

心臓がバクバク言っつて、私の足は震えていた。

「どうしよう……………」

今更、物凄い緊張が襲って来た。

何をしたらいいのか、どうすればいいのか、考えられなくなってしまう程。

——体が、動かないよ……………」

「………… エナちゃん？」

「っ……！」

中々来ない私を心配して、景都さんがリビングに様子を窺いに来た。

私はバスローブの胸元を掴んで、景都さんを振り返る。

「景都さん……………」

「大丈夫？」

「大丈夫……………です。準備遅くてごめんなさい」

一度約束したことだもの。

放棄するなんて、出来ない。

景都さんは、まだ心配そうに私を見ていたけれど、震える足に精一杯力を伝えて、私はあの部屋へと向かった。

私の後から、景都さんも部屋に入り、ドアを閉める。

「じゃあ…………… 始めようか」

「はい……………」

腰で縛った紐に、手をかける。

私の手は、まだ震えてた。

結びを解くと、シュルッと絹擦れの音が鳴る。

留め具を失ったバスローブは、私の肌を滑り、パサリと床に落ちた。

「……………」

顔が、マグマの様に熱くて、自分でも真っ赤になってるのが分かった。

恥ずかしくて、固く目をつむる。

「エナちゃん、緊張しなくていいよ。リラックスリラックス」

ニッコリ笑う景都さんは、今、私の裸を目の前にして何とも思っていないみたい。

そう、分かってる。

貴方が、女なんかに興味ないこと。

それでも、私は貴方が好きなんです。

貴方が、どんなに遠くても、私の気持ちは、変わらない。

「そこに座って楽にしてて」

「はい」

まだ、緊張も何も治まらないけど、景都さんの指示通りに動く。椅子に座って、ずっと同じポーズで固まっていなくちゃいけないのだと思ってたけれど、そんなことはなくて、考えていたよりは自由だった。

ただ、私を見つめる景都さんの瞳は真剣で。

何も纏わない私の体を見られていると思うと、体中が熱を持ち、有り得ない程に心臓が脈打った。

「………… エナちゃん」

「は、はい!？」

「エナちゃんの体、凄く綺麗。いい絵が描けそうだよ」

「え! あ………… どうも、ありがとうございます……………」

うつ………… そんなこと言われたら、もっと赤くなっちゃう…………。

時間が来るまで、景都さんは私を褒め続けて。

終わる頃には、私は完璧な茹蛸になっていた。

第五話【男の人】

私のモデル生活は、一応順調。

裸になるのは、やっぱり恥ずかしいけど、何回か熟しているうちに前の様に震えてしまう程の緊張はしなくなっていた。

今日も景都さんのマンションに行く予定なんだけど、学校が予想外に遅くなって、もう道は暗くなっていた。

「景都さん、怒ってるかな……」

こんなことで怒る様な人じゃないけど。

何となく言ってみる。

景都さんは、優し過ぎるくらいだ。

いつも、ニコニコ可愛い笑顔で。

怒るって言葉が、目茶苦茶似合わない。

「急がなくて」

十字路に差し掛かり、右へ曲がると後は一直線。

足早に歩いていると、ふと背後に人の気配を感じた。

自分以外の足音も、耳に届く。

「……？」

一定の距離を保って、その足音はついてくる。

私が歩を速めると、足音も速くなって、元に戻すと、同様に足音もゆっくりになる。

つけられてる……間違いない。

暗い夜道。

人は、誰もいない。

街灯が、私を照らすだけ。

——怖い……！

私は走り出した。

後ろから、慌てた様に私を追い掛ける足音。

まだ、ついてくる。

景都さんのマンションはもう少し。

走って、逃げて、マンションに着けば……。

助けて……景都さん……！

マンションが、見えた。

私は階段を駆け上がり、景都さんの部屋の前まで走る。

「はあ……ここまで来れば……」

ドアの前で立ち止まり、渡り廊下の先、先程駆けて来た方へ目を向けると、黒い人影が見えた。

嘘……まだついて来てたの！？

焦って、チャイムを鳴らす。

でも、中々景都さんは出て来ない。

ゆっくりと確実に、黒い影は近付いて来ていた。

「……っ！」

手が痛くなる程必死にドアを叩く。

何度も、何度も。

「景都さん！ 景都さん！！」

いないの……！？

影はもう、輪郭を確認出来るくらい、近くまで来ていた。

まだ若いであろう、どこか切羽詰まった男の顔。

スウッと、腕が伸びてくる。

……っ景都さん……！！

その時、ドアノブが回され、ガチャツと扉が開いた。

「……あれ？ エナちゃん」

髪から雫を滴らせ、上半身に何も身につけていない景都さんがド

アを開けた。

突然現れた景都さんを見て、男は慌てて逃げて行く。

「……誰？」

その男を見て、ポツリと呟いた景都さんの声は、いつもより幾分低く。

「あ……何か、追い掛けられて……」

「え……？」

一瞬、景都さんが眉を顰める。

その時だけ、景都さんを取り巻く優しい温かさは弾け飛び、ゾクツとする程の何かを感じた。

「何も……されなかった？ 怪我は、ない？」

直ぐに私に目を向けた景都さんは、もう、いつもの景都さんで。瞬く間に見せたあの顔は、見間違いだろうか。

「何ともないです。ありがとうございます」

本当は、まだ怖くて。

微かに体が震えてた。

でも、精一杯の笑顔を見せて、強がってみせた。

けど、私が無理してるの、景都さんは気付いたみたいで。

私を労る様に、部屋へと通してくれた。

リビングに向かいソファーに腰掛けてみると、二つのマグカップを持った景都さんが私の隣に座り、

「はい」

と手渡されたそれは、温かいココア。

それを受け取り、温もりにホツとする。

うつん、違う。

私がホツとしたのは、景都さんの優しさ。

彼の温かさに、心が触れたから。

もう、怖くなかった。

「ごめんね、出るのが遅くなって……。シャワー浴びててさ……」
「いえ、そんな……」

……シャワー。

そう言えば景都さん、上半身裸……。

そのことに気付くと、顔が熱くなって。

パツと景都さんから視線を外す。

意外にも靱かな筋肉のついた綺麗な体。

今の景都さんは、どこからどう見ても男の人で。

ドキドキが、止まらない。

自分を追い込むだけと分かっているのに……。

景都さんのこと、もっともっと、好きになってしまっていた。

第六話【溢れ出す想い】

あの出来事以来、景都さんは私を迎えに来てくれる様になった。前も、モデルを終えた後に送ってくれていたけれど。

今は、どんなに早い時間だって、私を迎えに来てくれる。

今日も学校が終わる頃、校門前に景都さんの姿。

制服の群れに一人、サングラスをかけてスーツに身を包み。明らかに目立ってる。

景都さんには似合わなさそうなコーディネートなのに、完璧なまでの着こなしは何故なんだろうか。

「景都さん！」

「エナちゃん。お疲れ様」

サングラスに隠れて、景都さんの確かな表情は伺えないけれど。彼がいつもの様に、花の様な笑顔を浮かべてることは手に取る様に良く分かる。

「ちょ……ちよつとお！ 誰よこの人、すごいイケてんじゃない！」私の斜め後ろから、友達の一人が驚愕の声を上げる。

ほんのり頬を染め、瞳を輝かせている彼女に、

「この人ゲイなの」

と打ち明けたら、きつとぶっ飛んでしまうだろう。

「まさか……エナの彼氏、とか？」

「え！？ 違……っ」

「そつでえす」

赤くなつて、慌てて否定しようとしてる時に、景都さんが私の肩を抱き寄せる。

案の定私は、顔から火が出ちゃうんじゃないかってくらい、真っ赤っ赤。

「景都さん！？」

「あはは！ 冗談だよ」

景都さんはパツと私から離れた。

冗談だと笑いながら。

それでも、嬉しいと思っちゃう私は馬鹿なのかな？

「なあんだ。じゃあ、二人はどんな関係なの？」

「あー…… っと、話すと長くなるからまた今度！」

私は友達の詮索から逃れる為に、その場限りの言い訳をして景都さんの背中を押す。

「景都さん早く行こ！」

「あ！ ちよつとお！」

友達はまだ何か言ってたみたいだけど、まさかヌードモデルやってますとは言えるワケないし。

ゲイの彼に恋してるとか…… もつと言えない！！

焦ってその場から逃げ出した私に、景都さんは苦笑していた。

「……ごめんね？ 変な冗談言って」

私の顔を覗き込みながら、景都さんは笑顔を浮かべてる。

その行動が、本当に冗談だったと物語ってる様で。

「……」

「怒っちゃった？ …… よね。私みたいな奴にあんなこと、冗談でも気持ち悪いよね」

「別に、そんなんじゃ……」

そんなんじゃない。

怒ってるワケでも……。

嬉しかったし。

ただ、景都さんに、お前なんかこれっぽっちも見込みはないって言われてるみたいで…… 辛い。

まあ、本当に見込みはないんだろうけど、僅かな希望に縋ってる私としては、すっごく痛いワケで。

ゲイのくせに…… 乙女心くらい理解しなさいよ！！
はあ……。

この日は、モデルをしてる間中も、私は浮かない顔をしていたと思う。

その証拠に、景都さんもずっと困惑した表情だった。

見込みがないからって、景都さんのせいじゃないのに。

私って本当に嫌な女。

こんなんじゃ、見込みどころか景都さんに嫌われちゃうよ……。

「はあ……」

「……今日はもう止めようか」

「え？」

カタ、と筆を置いて、景都さんが伸びをする。

時間を見てみると、まだ七時で。

約束の時間まで、あと二時間はある。

「エナちゃん、何か無理してるみたいだから……」

「な、何でもないんです！ 平気です！」

「うん……。でも、今日は止めとこう」

肩と首を解しながら、景都さんは部屋を出て行く。

残された私は、一人呆然と、景都さんの出て行ったドアを見つめていた。

しん……と静まり返った部屋。

ポタリ。

雫が零れ落ちる音だけが響く。

景都さん……怒っちゃった？

私はずっと、嫌な態度とってたから。

本当に、嫌われちゃったのかな……。

私は何も身に纏わぬまま、羽織るバスローブさえ忘れて。

立ち尽くしたまま、溢れ流れ落ちる涙は耐えることが出来なくて。

血が滲む程唇を噛み締めて、泣いてしまった。

声だけは、殺して。

溢れて、溢れて。

止まることを知らない涙は、零れる度に染みを作り。

どうして好きになってしまったんだろう。

どうしてあの時、諦めなかったんだろう。

そんなことばかり、頭に浮かんで消えて行く。

彼がゲイだと知った時に、諦めていればこんなに辛くなかった。

今はもう、引き返せない程に好きになっていて。

報われないこの想いをどうしたらいいのか。

私はもう、壊れてしまいそう。

「……っ、ひ……っく」

辛くて悲しくて、声を我慢なんて出来るワケないのに。

やっぱり馬鹿な私。

駄目……泣いちゃ駄目……。

声を上げちゃ駄目。

景都さんに気付かれてしまう。

泣いていること。

私の気持ち。

でも、もう堪えられなかった。

「ふええ……」

その場にしゃがみ込んで、私は泣きじゃくった。

離れた所から、ガシャンツと言う音がして、走る騒々しい足音が

近付いて来る。

「エナちゃん!？」

入口の枠につかまりブレーキをかけ、景都さんが部屋に飛び込ん

で来た。

泣いてる私に気付くと、鱗たえながら走り寄った。

「どうしたの!？ こんな格好のままで……!」

景都さんは側に落ちてるバスローブを拾うと、慌てて私の肩からかけてくれた。

私の顔を伺ってオロオロしてる景都さんは、それでも私の頭を撫

でとれていて。

今は、景都さんの優しさが、何より辛い。

「うつ、うつ……ひつく、ふええ……！」

もう、止められない。止まらない。

好きの気持ち。景都さんを想う心が。

景都さん。景都さん……。

「景、都さん……っ」

目の前に、私に合わせてしゃがんでいた景都さんに、私はギュッと抱き着く。

胸元に頬をくっつけて、落ち着こうと必死になつてしがみついた。景都さんは何も言わずに、そんな私を抱きしめてくれて。

景都さんの腕の中で、私は決めたの。

報われない想いであっても、告白しようって。

この想いが、行き場をなくして、私の中で膨らみ続けるから、こんなにも辛いんだ。

それならいつそ、ハッキリと振って貰った方が、きっと楽になると思つたから……。

第七話【決意と真実】

鳴咽が酷くて、中々落ち着かなかったけれど。

抱きしめてくれる景都さんの手が、私の背中を撫でてくれていて。次第に、呼吸も調って行った。

「……………」

「……………落ち着いた？」

私が頷くと、景都さんはそっと私の体を開放する。

景都さんは開けてるバスローブの胸元を閉じてくれて、心配そうに私を見つめてる。

何か、聞いたそうな顔。

そりゃそうだよな、いきなり自分の家で女の子が泣き出したんだもん。

「景都さん……………」

「ん……………」

私は、固く拳を握る。

震えない様に。

決心が鈍らない様に。

どっちみち、景都さんの前で泣いてしまったのだから、後戻りは出来そうにない。

私は顔を上げて、景都さんの瞳を見つめながら。

今、想いを告げる。

「私、好きな人がいるんです……………」

いきなりは、言えないから、遠回しに伝え始める。

突然そんなことを言い出した私に、景都さんは目を丸くして驚いてる。

でも、直ぐに優しい瞳になって

「その好きな人のことで、何かあったの？」

私の話しを、聞いてくれようとしてくれた。

「私、片思いで…… 失恋決定なんですけど、まだ好きで……」

「……告白したの？」

「……してません」

今、しようと思ってるんです。

でも何だか、好きな人本人に恋愛相談してるみたいで、情けない
様な……。

「告白してみなきゃ、失恋決定じゃないでしょ？ 何もしてない内
に諦めたら、勿体ないよ？」

やっぱり情けない。

本人に背中押されちゃってさ。

私ってば、馬鹿過ぎる。

景都さんは私を見つめながら真剣に聞いてくれて、アドバイスを
くれた。

好きな貴方に後押しされたら、もう。

言うしかない。

「告白、してみます……」

「……うん、そくだよ。行動に移さないと、何も分からね……」

「好きです」

景都さんの言葉を遮り、私から発せられた想いの言葉。

景都さんは真顔で、私を見ながら止まってる。

急だけど、伝わったかな。

緊張と不安に押し潰されそう。

けど、負けずに景都さんの言葉を待つ。

景都さんは相変わらずポカンとしてたけど、突然動揺の表情を浮
かべた。

「え？ エナちゃん…… それって……」

「景都さんが…… 好きなんです」

「エナ…… ちゃん……」

景都さんは信じられないと言った表情で、じっ、と私を見つめて

る。

それはそうだろう。

ゲイである自分が、まさか女の子に好きだと告白されるなんて、予想も出来ないだろうから。

景都さんは黙ったまま、俯いてしまった。

「……」

「……」

二人無言のまま、時が過ぎて行く。

時計の音だけが、カチカチと耳を掠める。

景都さん、きつと凄く困ってるだろうな。

女性が女性に告白されてる様な感じなのかな……。

振られること、私は覚悟してる。

悲しいけど、それでこの辛さから開放されるなら。

それで、いい……。

そう思いながら、私の涙は、再び視界を濁らせた。

「景都さん……早く、私のこと振って下さい。じゃないと、報われない抱え続けて……辛い……っ」

嗚咽が邪魔して、うまく喋れない。

涙が次から次へと溢れてきて、もう、言葉を紡ぐことさえ困難になっっていた。

肩を震わせ、拳を造り目頭にあてて、流れる涙をせき止める。

けれども、隙間から零れる雫は、じわじわと拳を濡らすだけ……。

何故、黙っているの？

早く私を突き放して。

この想いを、諦めさせて。

もう、辛い……！

そう、叫びたいのに……。

「——ごめん」

ふいに聞こえた、景都さんの声。

その言葉に、ビクリと微かに体が揺れた。

覚悟はしていた。

辛い苦しみから開放されたかった。

私はそれを、望んでいた。

なのに、景都さんの

「ごめん」

の言葉は私を貫いて。

カタカタと震える体を制御出来ず、勢いを増した悲しみに、そのまま飲み込まれてしまいそうで、怖くて。

私は、その場から逃げ出そうとした。

「待って!!」

立ち上がり走り出そうとした時、がしっと手首を掴まれる。

景都さんの手は私の手首をきつく握り締め、逃げることを許さない。

「放して!」

「エナちゃん!! 話を……聞いてくれ……」

景都さんの必死のその瞳に、私の体が、停止する。

強い眼差しに捕えられて、目を逸らすことが出来なかった。

ふう、と小さく息を吐いた景都さんは、ゆっくりと口を開いた。

「そんなに、苦しめてとは思わなくて……本当にごめん」

「……」

何で、景都さんが謝るの?

そんな必要、ないのに……。

私は言葉が出なくて、頭の中で疑問を繰り返す。

景都さんは、話を続けた。

「どうしても、君をモデルに描きたかった。断られなくなかったから……」

景都さんの表情が、どんどん雲っていく。

辛そうに眉間に皺を寄せ、俯いてしまった。

「あの……?」

私は、景都さんの話しが、全く理解出来なかった。

何故、今更そんな話題を持ち出すのか。

「君が、俺を男だと意識しない様にすれば、引き受けてくれるんじゃないかと思って……」

——ん？ 何？ どう言うこと？

景都さん……今、

「俺」

って言った。

もしかして……？

「……景都さん？」

「ゲイだなんて言うのは、嘘なんだよ……」

「あ……」

夢……、夢みたいな、現実。

景都さんは、普通の男の人？ 本当に？

そうなら、騙されてたことになるけれど、そんなこと、もうどうでもいい。

私、好きでいていいの？ いいんだよね？

頭を抱えてしまった景都さんの前で、また、涙が止まらなくなる。ひとつ、またひとつ。

ポロポロと零れる涙は、先程のものとは違っていた。

「景……っ！ ひっ、う……っ」

声が、漏れる。

あんなに頑張って堪えようとした泣き声が、枷がなくなってしまう様に、止まらない。

「エナちゃん……」

景都さんは、いつのまにか顔を上げていて、泣き出した私を困った顔をして、見つめてる。

さらりと、私の髪を梳く様に撫でる景都さんの手。

涙で頬に張り付いた髪を、優しく別けてくれる。

「ごめんね……許してくれる……？」

その言葉に私が何度も頷くと、景都さんはクスツと笑って、私の

頭を強く引き寄せた。

「……………」

唇に、温かく柔らかいものが触れた。

景都さんの、閉じた瞳が見える。

触れているのは、景都さんの唇……。

初めての、キスだった。

「景都、さん……………」

唇が離れた時、私は恥ずかしいとか嬉しいよりも、何よりもビツクリして。

目を丸くしてる私を見て、景都さんは笑った。

「俺も、好きだったよ。ずっと……………」

そう言って、再び唇が触れたキスは、頭のとっぺんから爪先まで痺れてしまいそうな程の、大人のキスだった。

第八話【展覧会の前に】

想いが通じ合って、数日後。

景都さんは絵を描き上げて、それは審査を受ける為に、家の画廊から姿を消した。

審査の結果は、展覧会で発表されるらしい。

「あー！ 疲れた……」

ソファに大の字に凭れかかり、目元に手の甲をあてて景都さんは安堵にも似た溜息を吐く。

絵を完成させ、後は評価を待つのみとなった今、全てをやり遂げたと感じた感じなのだろうか。

「本当……疲れたあってオーラが出ますね」

「……」

……………。

何故か、沈黙が流れる。

私変なこと言った？

気まずくって、耐え切れずに口を開こうとしたら、景都さんがポツリと呟いた。

「ゲイのふりするのが一番疲れた」

「え？」

すると、景都さんはいきなり凭れていた背をガバツと起こし、ソファ横に立つ私へと視線を向けた。

「だってさ、なよなよするのも女言葉も気持ち悪いし、ボロが出ないかビクビクするし……」

真剣に見つめてるくせに、力説するのはそんな事で。

私は笑いそうになるのを堪えながら、景都さんの愚痴を聞いてい

た。

「それにね」

「はい？」

はぁ、と深い息を吐いたと思ったら、景都さんは頭をガシガシ掻き出して。

再び私に向けられた景都さんの顔は、微かに眉が下がって、頬が赤かった。

「エナちゃんを心底描きたかったから嬉しかったんだけど……。やっぱり裸見ちゃうと、耐えるのが大変と言つか……」

「……へ！？」

話しながら徐々に赤くなる景都さんなんか比にならないくらい、私はお馴染みの茹蛸に。

でも、恥ずかしいと思う気持ちとは逆に、私を見て平気なふりをしていただけたんだと思うと、嬉しくなってしまう。

「あは……ごめんね。俺まったく普通の男でした」

「景都さん……」

何だか照れ臭いけど、私は怖ず怖ずと景都さんの隣に腰掛ける。赤い顔を俯かせていると、ふわりと肩を抱かれた。

「あ……」

「エナちゃん、本当に俺でいいの？」

景都さんのいきなりの質問に、私の頭上には複数のエクスクラメーションが浮かんで見えたことだろう。

何で急に、そんなこと？

「俺とエナちゃん、九つも離れてるし……本当に俺なんか、好きでいてくれるの？」

え……歳のこと、気にしてるの？

私も最初は、そんな考えもあったかもしれないけど。

本当に好きな相手なら、歳なんて……。

「歳なんか関係ないです！ それに景都さんは見た目高校生でも通用しますし、もしかしたら私より幼い顔してるかも……」

まだ言い終わらないうちに、景都さんの表情がどんどん沈んで行く。

遂にはどんよりと俯いてしまった。

「あ……あの……？」

「はは……すごいコンプレックスなんだ、この童顔」

「え！？ ご、ごめんなさい！」

必死に頭を下げて、自分の軽率な言動を謝った。

コンプレックスだったなんて……魅力的な人だから、凄く好きな人だから、気付かなかった。

「いいよ、そんなに謝らないで？」

「でも……っ」

「だってエナちゃんは、俺のコンプレックスな所も引ってくるめて、好きになってくれたんでしょ？」

景都さんはそう言って、本当に嬉しそうに笑うから。

私は顔が熱くなって、何度も頷いた。

「ありがとう……」

その言葉と同時に、私の唇に触れた景都さんの唇。前触れのないキスに固まって目を見開いていたら、その気配に気付いたのか、閉じた瞼を開けた景都さんと目が合つて。

あまりの恥ずかしさに、私は慌てて後退した。

「……エナちゃん可愛い！」

「うひゃ！？」

ぎゅっと抱きしめられて、心臓は爆発寸前。

それでも、優しく髪を撫でる景都さんの手が、凄く心地良い。

「エナちゃん……展覧会、俺の絵の評価を、一緒に見に行ってくれる？」

「……うん」

景都さんの絵。

結局私は見せて貰えず、初めて見るのは展覧会か。一番最初に見たかったなあ。

きつと他のお客さんが先に見ちやうんだろっな。

景都さんに抱きしめられたままそんなことを考えてると、また、私の唇にキスの雨が降った。

「その時に、聞いて欲しい話がある」

唇が触れたまま、景都さんが囁く。

私がおか言う前に、深いキスに蹂躪されて。

話して、何だろう…。

それだけ浮かんで、その後は、頭が真っ白になって行った。

最終話「いつか、届いて」

それから二週間が過ぎ。

下校する生徒が賑わう校門前に、陽の光りに反射するボディが眩しい、青いスポーツカーが停まっていた。

う、わ……カッコイイ車……。

みんなの注目を集めるその車に、つつい視線を向けてしまうのは仕方がないこと。

ボーツと車を見てると、運転席のドアが開いた。

長い足が覗き、中から出て来た男性。

「エナちゃん！ 迎えに来たよ」

「けっ……！？」

——景都さん、だった。

「ど、どうしたんですか！？」

「今日結果出るから。行こう？」

「ええ！？」

「ほら！ 乗って乗って」

混乱する私を余所に、景都さんは助手席を開けて、私は押し込まれる様に乗り込む。

続いて直ぐに景都さんも乗り込み、車は動き出した。

「私、制服……」

「大丈夫だよ」

でも……ね。

ハンドルを操作する景都さんを横目で見遣ると、この前よりもシックで上品なスーツを着込んで。

こんなに突然な上に、身なりもちゃんと出来てないから、もの凄く不安。

「前以て言ってお下さいよお……」

「驚かせたくて」

そりやもう驚きました。

きつと景都さんの予想以上に。

景都さんって……本当に突然驚く行動するから……強引と言うか、天然？

そう言う所は、外見に見合って幼さを残してる。

でも、こんな車を持つてて、めちゃうちゃ優しくて、温かくて、キスも……大人で。

景都さんが、前に自分でいいのかって言うたけど、私こそ聞きたい。

私でいいの？　って……。

「着いたよ」

一時間程車を走らせて、やっと辿り着いた所は大きな美術館。入口には次々と人が吸い込まれていて。

隣接する駐車場に車を停め、私達は会場内へ。

足を踏み入れると、そこは既に別世界だった。

美しく飾られたオブジェに、色とりどりの絵画。

審美眼などない私でも、その空間に目を奪われた。

「こっちだよ」

呆然と立ち尽くす私の手を取り、景都さんはそのフロアから出ると廊下を進んで行く。

その壁にかけられた様々な絵に見向きもせず、長い廊下を抜けると、広いホールにも似たフロアに出た。

「ここは……？」

キョロキョロと辺りを見渡して、景都さんを見上げる。

景都さんは入口から真っ直ぐを見つめ、動かない。

私も、その視線を辿った。

「あ……」

その先には、綺麗な片翼の天使の絵が。

愁いを含んだ表情で、寂しげに自分の羽根を一枚、空へと放つ。
美しい、天使。

その絵には、金色の勲章が掛けられていた。

「この絵……」

「うん……金賞、とっちゃった」

「え……？」

やっぱり、景都さんの絵……！

嬉しいのに、信じられない。

そんな複雑な表情の景都さんに、私は思わず抱き着いた。

「景都さん！ 金賞だよ、金賞！ おめでとうー！」

涙が、止まらない。

私がモデルになって、景都さんが必死になって描いた絵。
みんなが、認めてくれたんだ……。

——ん？ でも……。

「私、こんなに綺麗じゃない……」

「あはは！」

あははって！？

景都さんを見上げると、優しい瞳で私を見つめていた。

ドクン、と胸が高鳴って、目が反らせない。

「話したいことがあるって……言ったよね」

静かに紡ぐ景都さんの言葉。

私は頷く。

ぎゅっと手を握られて、私は絵のすぐ前まで導かれた。

「この絵の天使は、間違いなく君だよ。でも、俺でもある」

「え？」

スツと、景都さんは絵の下を指差す。

そこには、タイトルがあつて。

『いつか空に届いて』

私はその意図が分からず、タイトルを見つめ首を傾げた。

「エナちゃんの姿を借りたけど、この天使は俺で、君は空なんだ」
「空……?」

「……片翼の天使は翔べなくて、いつかあそこへ行きたいと空に焦がれてる……。この絵が飾られた時に、俺の気持ちを伝える筈だったんだけど……」

まだ、言葉の意味が理解出来なくて、私は絵を見つめる景都さんをずっと見てた。

ゆつくりと、景都さんは私に向かい、微笑んだ。

「この天使が空に焦がれる様に、俺もずっと君に焦がれてた。初めて君を見た、あの日から……」

「景都さん……」

初めての出会いは、思い出すだけでも恥ずかしくって。

でも、あの日から景都さんは、私を好きでいてくれたの？

嬉しい……。

ありがとう景都さん。

金賞、おめでとう……。

——後日、コケただけの私のどこが良かったのか、どうしても分からなかったから、満を持して聞いてみた。

「あの時、直ぐに起き上がらなかったよね？ そしたら震え出して、泣いちゃったかと思ったら大笑いしながら起きたでしょ。見てて本当に面白くて」

「……」

結局、よく分からなかった。

景都さんは今、絵画雑誌や展覧会へ飾る絵を描いていて、忙しい毎日を送ってる。

私は学校はあるけど放課後は暇で、でも邪魔になると思って景都さんのマンションには行っていない。

前の様に、朝の

「おはよう」

だけの関係に戻っちゃってるけど。

景都さんの仕事が一段落したら、泊まりにおいでって言われてるから……。

——本当は、景都さんのマンションに行くのは、景都さん自身に止められてたりする。

仕事にならないって……私に触りたくなくて仕事にならないって。うう、恥ずかしい……。

「ねえエナちゃん。仕事が終わったらさ、ご褒美にぎゅってさせてキスも……それ以上もしたいけど」

「えー!？」

カワイイ笑顔の景都さんは、私には刺激の強すぎる、オトナの男の人です。

END

最終話「いつか、届いて」（後書き）

最後までお付き合い下さった方々、ありがとうございました！感想等あれば是非お寄せ頂けると有り難いです。これからも頑張りますので、また他作品でも愛読して頂けると嬉しいです（＾－＾）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2422b/>

カワイイヒト

2010年10月8日12時54分発行